

「暮らしの中にある農業」

吉川 努 (46 歳) 新規参入
(今治市)



1 就農の動機・理由

東京で経験した東日本大震災を機に、暮らしと仕事を見つめ直した。災害が少ない瀬戸内地域を移住先として候補に挙げ、地域おこし協力隊制度を活用して今治市の大島に移住した。移住後の生業として、農業を選択するにあたり、農業次世代人材投資事業を利用するために、研修先がある大三島での就農を決意した。

2 農業経営の概要

○経営の展開

項目	就農時の経営 (2016年)	現在の経営 (2019年)	将来の経営 (2023年)
労働力	男 1 人(本人)	男 1 人(本人) 女 1 人(妻)	男 1 人(本人) 女 1 人(妻)
経営耕地	畑 19 a 樹園地 1 a 計 20 a	畑 24 a 樹園地 10 a 計 34 a	畑 44 a 樹園地 20 a 計 64 a
経営内容	少量多品種野菜 19a 柑橘 1a 養蜂 4 群	少量多品種野菜 24a 柑橘 10a ジュース 136 本 養蜂 16 群	少量多品種野菜 44a 柑橘 20a ジュース 240 本 養蜂 20 群

○農業用施設

ビニールハウス 3 棟 (3.7a)

○主要農業機械

軽トラ 1 台

管理機 2 台

畝立機 1 台

刈払機 2 台

3 あしあと

(1) 就農までの主な経歴

出身地

佐賀県佐賀市

職歴

測量関係(7年)

飲食関係(13年)

地域おこし協力隊(2年)

就農研修歴

平成 26 年 4 月～28 年 3 月

今治市上浦町の越智資行氏の指導の下、研修を行う

就農年月

平成 28 年 6 月 就農

(2) 就農時の思い

栽培期間中に農薬・化学肥料を使用せずに固定種を栽培し、一般の生産者と差別化した販売を行う経営を志していた。しかし、同様の形態をとる農家仲間が身近にいなかったため、安定して美味しい農産物ができるか不安だった。

4 就農時の取り組み

(1) 技術の習得

研修先で、栽培期間中に農薬・化学肥料を使用しない野菜、果樹の栽培技術や販売方法について学んだ。併せて農業用機械類の操作法等も習得した。

(2) 資金の準備

原則、自己資金で対応している。また、農業次世代人材投資事業（準備型、開始型）を活用している。

(3) 農地・住宅の確保

就農前の協力隊として活動していた時に、自分で空き家や耕作放棄地を探し、直接地主と交渉して借り受けた。農地 30a を確保するまでに 2 年を要した。

(4) その他苦労したこと

農地を確保する際に、農薬を使用しないため圃場の隣接地の栽培形態や状況に対して細心の注意を払った。

5 農業経営の特徴

年間を通して、個人への野菜詰合せセットの販売を経営の軸として行っている。農薬を使用しないだけでなく F1 品種を全く使用しない、固定種のための農産物を扱う。

6 これからの夢

これまでは個人への野菜詰合せセットの宅配を進めてきたが、経営的な限界が見えてきた。

これからは生産者と消費者を結ぶ取り組みにチャレンジし、モノ(農産物)だけを売るのではなく、コト(体験)も売る経営に取り組みたい。

7 成功したキーポイント

地域の住民として溶け込むことが一番重要である。地域行事や自治会などに参加することにより住民から認められ、地域の中で生きていくことができる。まずは、あいさつが何よりも大事である。

8 就農を目指す方へのアドバイス

就農するときは、何もかもが初めての経験で、大丈夫かなと不安に感じ、一步を踏み出せない状況に陥りやすい。

スタートラインに立つためにも、まずは行動を心掛けてほしい。

○ 指導機関からのひとこと

吉川さんは非常にまじめで、自分の営農スタイルを探求し続けている。同じ栽培方法を取る仲間の中でも中心的な存在で、組織運営や販売方法などで広い視野を持って行動されている。引き続き後輩たちをリードし、地域農業を盛り上げていていただきたい。

執筆機関

東予地方局産業経済部

今治支局地域農業育成室

しまなみ農業指導班

電話番号 0897-72-2325



野菜苗の管理作業